

# 序文

## 紳士のスピリット

静岡県ボート協会顧問 田中高志

昨今、紳士という言葉はあまり使われなくなったのではないのでしょうか。言葉が使われなくなるとは、それに当たる事柄が少なくなったということです。しかし、この本からは、まさに紳士とも呼ぶべき人物が目の前に浮び上がるでしょう。

紳士とは何か。それは「礼儀正しく、上品」というだけでなく、まさに、イギリスのイートン校やオクスフォード大学のスピリットを体現している人のことなのです。苦難に遭ってもけっしてひるむことなく、自らの意志で心身を鍛え立ち向かっていく。その強さはチームワークの中で培われ、より強固になっていく、そうした力をもっている人のことなのです。

内藤氏が入部されたころの一橋大学端艇部は名門でありながら、東大との定期戦には負けることが多く、全日本選手権には11年間一度も勝てなかったのだそうです。しかし、氏は主将として部員に檄を飛ばし、基礎的な体力作りから徹底的に鍛え直し、ついに全日本選手権エイトで優勝しました。その決勝の相手が遠来のオクスフォードクルー。わずか30センチ差の勝利でした。

翌年はローマオリンピック。氏は留年してまで、全日本から更に

大きな目標のオリンピックを目指すのです。しかし、武運拙く代表決定戦に負けてしまいました。だが、勝つも負けるもそれは結果ではない。大切なことは、高い目標を掲げ、「青春のすべてを賭けて」いかに燃えていくかだ。これが紳士としてのスピリットなのではないでしょうか。

「ブルー」と呼ばれるオクスフォードの選手は、歯を食いしばるほどの激しいトレーニングをしたあと、岸に上がれば身なりを整え、静かに読書をするということがあります。そうしたクルーと激戦を繰り広げた内藤氏たちは、43年後に再び来日したオクスフォードクルーのメンバーと旧交をあたためます。

氏のボートへの情熱は、選手からコーチに移っていきました。そして、その後は、静岡県ボート協会の理事長として10年、会長として実に17年の間腕を揮うことになるのです。見事なリーダーシップを発揮された氏は、先見性と優れた洞察力に富んだ視点で協会をまとめ、行政当局と連携しながら天竜ボート場を開設し、ボートの聖地として定着させました。こうした氏のボートに対する情熱と大きな業績は、本文を読んでくださればよくわかります。

私は、「NEW!! わかふじ国体」の前、ある方に協賛をお願いするため、内藤会長のお供をして東京に出かけたことがあります。場所は、墨堤と呼ばれる隅田川河畔。「川とボートとの60年」にもあるように、そこは幾多の文人墨客が訪れ、作品の舞台となりました。そこで私たちは訪問時間まで休憩をし、川を眺めながら会長の学生時代のお話をお聞きしました。明治の時代から「隅田の水はテムズに通ず」

とって、学生がボートを漕いだ川です。内藤選手もまたひたすらボートを漕ぎ、その情熱が全日本でのオクスフォードクルーとの競漕に続くのです。

桜並木の続く土手で、会長の静かな語り口のお話を聞いた時間は、私にとっては今なお懐かしい至福のひとつでした。

氏の活躍される場は、ボートに止まりません。サッカーのJリーグ立ち上げにも深く関わっておられた氏は、「トップアスリートへの道」を語り、地域スポーツのあり方を提唱されます。

氏は、静岡県をボートの強豪県にし、天竜ボート場を中心とした環境づくりに力を尽くされましたが、ボートのことだけを考えておられたわけではありません。「現在のストレス社会や、昨今の殺伐とした世相をみるにつけ、スポーツの重要性がある」と思うからこそ、「Jリーグと地域社会」のあり方に学ぶ必要があると説かれるのです。

サッカーとボートの意外な関係は、サッカーのワールドカップのあと書かれた2003年の新聞掲載の文章で教えられます。ブラジルの名門クラブであるフラミンゴは1895年創立。バスコ・ダ・ガマは1893年、ボタフォゴは1904年。そのクラブの正式名称は「クルービ・デ・レガッタス」、つまり「フラミンゴ・レガッタクラブ」ということで、もともとボートクラブの中にサッカー部門ができたからこのように呼ぶのだそうです。そして、今も創立時のクラブ名とエンブレムを保っているのです。

こうしたクラブは現在、ボート、サッカー以外のスポーツもある総合スポーツクラブになり、たとえば、フラミンゴのボートは

州選手権で優勝するほどだということです。

氏が提唱される地域スポーツのイメージの一つであるのかもしれませんが。

この本を手にするみなさんは、ボート競技のノウハウを知ろうというだけでなく、豊かな学識に満たされたイギリス流紳士の穏やかな回想に耳を傾ける気持ちで読んでみられたらいかがでしょう。

そうすれば、「あるボートマン」の60年の足跡を追体験することで、ボート競技そのものの理解を深めることはもとより、青春の姿、リーダーとしてのあり方、広く世のため人のために尽くす生き方を考える契機になると思います。



# 目次

<b>序文</b> 静岡県ボート協会顧問 田中高志 . . . . .	1
<b>川とボートとの60年</b> . . . . .	9
<b>青春のすべてを賭けて</b>	
本年度対校クルー紹介 . . . . .	15
全日本へ向かって . . . . .	18
ローマへの抱負 . . . . .	20
戦い終わりで . . . . .	23
<b>コーチとして、OBとして</b>	
65年度クルーへ . . . . .	27
優勝おめでとう . . . . .	28
HOW TO RACE . . . . .	30
朝日レガッタの思い出 . . . . .	32
ボートとは何か . . . . .	34
これだから勝った . . . . .	36

## 高校ボートへの思い

大きい夢描き挑戦・・・・・・・・・・・・・・・・	41
漕艇100年の伝統背に・・・・・・・・・・・・	42
MILEAGE MAKES CHAMPIONS・・・・・・・・・・	43

## ふるさと静岡のボート

天竜漕艇場この10年、これからの10年　・・・・	45
New!!わかふじ国体ごあいさつ　・・・・・・・・	49
全国中学選手権記念大会ごあいさつ・・・・・・・・	53

## ボートとサッカー

Jリーグと地域社会・・・・・・・・・・・・・・・・	55
私の交友録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	57
トップアスリートへの道・・・・・・・・・・・・	59

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	66
----------------------------	----

春は春は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	70
----------------------------	----



浜松市 佐鳴湖旧艇庫 1975 年頃



# 川とボートとの60年

## 佐鳴湖

自分の記憶にはないが、まだ物心つかない頃佐鳴湖畔の家の前から2度転げ落ち溺れかけたとあとで親から聞いた。かすかに憶えているのは湖で艇を漕いでいる学生の姿である。第二次大戦まえの浜松工専（現静岡大学工学部）のフィックスだった。

休日には湖面いっぱい賑わい、近所の子供たちはみな泳いだ。私も、学校では野球、家では和船とおわんボートを漕ぎ、泳いで遊んだ。静岡大学付属中学と浜松北高校の6年間、坂のある砂利道を往復約8キロメートル自転車を漕いで通った。こんな経験がのちの全日本エイト優勝に結びついたのかもしれない。

## 隅田川と利根川

一橋大学に入ったとき、自然に隅田川の艇庫に足が向き、ボート部に入った。運動部の中で唯一日本一になれる部であったことも理由であった。3階建ての艇庫は下町情緒ただよ花街墨田区向島の川岸に聳えていた。墨堤の桜、言問だんご、長命寺の桜餅、対岸は浅草である。高見順の小説「胸より胸に」はボートマンと浅草の踊り子の物語。“春は春は桜咲く向島・・・”がその一節にある。

明治時代、学生が海外雄飛を夢見て“隅田の水はテムズに通ず”と言ってボートを漕いだ。その象徴である遠漕が大正、昭和と連綿と続き、向島から品川沖に漕ぎ出し、年1回、江戸川から利根川の銚子までの往復360キロメートルを1週間、朝から晩まで艇を止めずひたすら漕いだ。ボート四季歌の春の向島、夏の綾瀬川、秋の品川、冬の坂東太郎（利根川）は、戸田や荒川とともに、私がボートに明け暮れた世界である。

## 戸田ボートコースと荒川

4月の東商戦が終わると覚悟を決め戸田に移る。向島に比べあまりにも殺風景、対校選手だけの合宿所は戦後まもなく建てたバラックで狭くて暑い。戸田コースと荒川コースでのハードトレーニングだった。対校エイトを2年生のときから4年間漕いだ。昭和32年、事実上の決勝戦といわれた準決勝で、優勝した慶応大にキャンパス差で負けた。昭和33年、エイト整調で全日本選手権準優勝、昭和34年、主将エイト6番、遠来のオクスフォード大を破り全日本選手権を制覇した。留年してローマオリンピックを目指したが、堀内浩太郎さんコーチの東北大がローマに行った。

## 再び佐鳴湖

大学を卒業し日本楽器（現ヤマハ）に入社。札幌支店に転勤するまでの4年間静岡大学ボート部のコーチになり、昭和40年全日本選手権舵手つきペアで優勝した。

## 北海道茨戸コース

札幌では茨戸を時々訪れた。昭和32年、オクスフォード大学、北海道大、東京大、早稲田大、慶応大、一橋大が朝日新聞社の招待で茨戸朝日レガッタエイトを漕ぎ、全日本選手権に続き、一橋大が連覇した思い出のコースである。平成14年8月、当時のオクスフォード大学選手諸君が来日し、かつてレースをした各大学OBが札幌に集まり旧交を温め、舵手つきフォアで1000mのレースを行った。地元新聞はオクスフォードが43年ぶりに一橋に雪辱したと書いた。

## 全国各地の川

昭和40年代、国内、海外の転勤で浜松の本社を約10年余離れていた。海外から帰国後ヤマハ発動機に転じ、昭和50年代から磐田本社や近くの事業所に勤務した。ヤマハ発動機ボート部に籍をおき

蒲郡工場長の時は直接ボート部を指導した。昭和58年、亡くなった青木賢一さんのあとの中部漕艇連盟役員を要請され、中部の親子ボート教室を積極的に行った。その後、県漕艇協会会長が佐藤實さんから堀内浩太郎さんになり、実務も東部から西部ということで理事長を古谷基徳さんから、事務局を池谷邦行さんから引き継いだ。国体静岡県総監督8年間、中部選手権、全国中学選手権、全国市町村交流レガッタなど各地の大会に出かけ、転勤の地や出張のとき訪れた会場など、足を運んだボート場は、北は北海道網走湖から南は沖縄県塩屋湾まで全国約60カ所におよぶ。

## 天竜船明ダム湖

確か昭和61年、旧天竜市教育委員会、青年会議所の方々が中日本レガッタの会場を訪れ、天竜のボートについて協力要請があった。中部ボート連盟の鎧塚一理事長、日本ボート協会の佐々木亨理事、私が天竜閣に集まり協議し、本多直彦市長に面会したところ全国高校総体誘致の話になった。私は、我が家の前の佐鳴湖高校総体をイメージしていたが、県ボート協会理事長として天竜を決断した。全国高校総体、2巡目国体、そして全国高校選抜大会は第18回大会を迎える。天竜は総務省・文部科学省指定のボート拠点、高校ボートのメッカとなり、静岡のボートは大きく発展した。

## 佐鳴湖の今

佐鳴湖湖畔に今も住み、家から練習風景を毎日のように眺めている。この60年、最初たった1隻のフィックス艇が今はおそらく5つの艇庫に100隻はある。朝は大学、午後は中学、高校の部員が、休日には社会人選手や小学生から高齢者のクラブ会員も加わり、コース狭しと漕ぎ、その風景は壮観である。協会加盟団体数は、静岡県が東京都に次いで第2位。市でいえば浜松市、水域では佐鳴湖が日本一である。

## これからの静岡の川

静岡は日本屈指のボート県になった。これからの60年も、発祥の地狩野川、中部の巴川、西部の佐鳴湖、天竜船明、浜名湖、そして新たに開発される水域など静岡の川で漕ぎ継がれ、競技スポーツとして、健康スポーツ・生涯スポーツとして、ボートが益々盛んになっていくと確信している。

〔 静岡のボート 2007年7月 〕



一橋大学対校クルー 1959年 戸田（著者は6番）

# 青春のすべてを賭けて

## 本年度対校クルー紹介

一橋端艇部は、昭和二十三年以来連敗の記録を重ね、幾多の先輩の涙ぐましい努力にも不拘、いつも今一步のところで優勝を逸し、悲運の涙を吞んで来た。今年こそはと繰返すこと十余年、昨年もまた全一橋の期待を完全に裏切り惨敗を喫してしまった。我々は今年もまた「今年こそは」と云わねばならない。しかし、我々の間に、今年は例年に見られぬ「本当に今年こそは」の意気の盛り上がりがある。我々は我々の手でこの連敗記録に終止符を打ち、更には明年のオリンピック予選をも制覆せんとの意気込みで、皆一致団結一丸となって突進しなければならぬ。矢は既に放たれた。レースは既に始まっているのである。我々は唯、ロウアウトの精神を以って死闘するのみである。

昨年 of 全日本レース終了直後、若い先輩と学生が集まり色々話し合った結果、昨年のレースに鑑み、これからの一橋端艇部は先ず基礎体力を強化しまた選手層を厚くしなければとうてい勝てぬという結論に達した。そこで我々はこの線に添って九月早々練習を開始したのである。秋季小会返はH・C・S各組に分かれ、前期部員を中心に小平に於て陸上練習を行い、週1回向島でナックルフォア、及びエイトで実際の艇を練習した。秋季小会が近づくに従って向島の通い練習を段々と増してゆき、本格的な秋季小会合宿に入った訳であるが、この合宿は例年より1週間多くチャン、セコ、サードと充実した練習を

行うことが出来た。秋季小会以後は、従来であると、大体対校選手が決ってしまい他の部員は殆んど練習らしい練習をしないのであるが、今度の場合は、選手層を厚くするという意味で、全部員対校候補ということにして、全員練習に参加させた。これは小平に於ける陸上練習が主で、一部の者は一橋寮に合宿して十一月一ぱい脚、腰、腕など基礎的体力の鍛錬に重点を置き、ランニング、ダッシュ、懸垂、バック台などを行った。またこの時は体操の専門家をお願いして、柔軟体操、鍛錬体操などを教えてもらい、これも併せて行い体力の強化を図った。

昨年の全日本レースで我々は体力の無さをしみじみ感じ、陸上練習による体力鍛錬の必要性を痛感した。そこで昨年九月の練習開始以来現在迄、ずっと陸上練習による体力強化を継続して行って来ている。特に昨年のレースで指摘された腕の弱さを無くする為に、懸垂、バーベル、チューブ引きを行っている。十二月に入ってから年末迄、合宿の都合上一応対校候補を選抜して向島で合宿に入った。これは秋季小会及びそれ以後の陸上練習の活躍状態を基準にし、その頃既に対校コーチに正式に決定していた佐藤和実先輩と相談して選抜したものである。またたとえ体は小さくとも熱心でファイトがあり、自ら対校を志望した者をも加えた。そしてエイト2クルー及びフォア1クルーを編成して強化合宿に入った訳である。この期間は、新人は勿論或程度漕歴を有する者も全部一応白紙に返し、初めからやり直しのつもりで、基本をみっちり身につける様努力した。この合宿では特にクルーを一定せず、新人旧人いろいろ組み合わせさせてクルーを作ったが新人もよく旧人に追い付き、可成りの上達を見せて呉れた。更に年が明けて



今年の一月八日より十日間我々の漕法の基礎をかためる意味から、同じメンバーで強化合宿を続け一応の成果を上げることが出来た。ここではじめて対校クルーが正式に編成され、以後対校分離で練習を続けることに決ったのである。

一月の強化合宿終了後は、再び陸上練習及び向島の通い練習を続けたが、学年末試験の為一時練習を中断した。試験が終って、三月七日より一週間、富浦で陸上練習の合宿を行った。これは向島の合宿に入って直ぐに漕げる様に体を慣らすのが目的で、或る程度リエクリエーションを兼ねたものであったが、海岸を走り山に登り、大いに成果を上げることが出来た。三月十五日から向島で合宿に入り十日間ばかりフィックスの練習を行った。フィックスの練習は腕と腰の鍛錬であることは勿論あるが、スライデングの要素を除いたエイトの漕法で漕ぎ、特にスライドを使わないから動きが単純で腕の動きのマスターが容易となり、この点大いに役立った。三月二十七日から本格的エイトの練習に入り合宿も向島から戸田へと移ってもりもり漕いるところである。

今年の対校クルーは体格的には一橋としては今迄に無い大型クルーであるが、ローイングの技術の点でも未だ拙劣であり、また我々より大型のクルーは他に沢山居る。勝負の世界は実力の世界である。決して安閑としては居れぬ、常に努力精進を続けなければならない。幸いにして我々は元気旺盛、ファイティングスピリットに溢れている。我々は佐藤コーチの下如何なる逆境にあっても決して挫けぬ不撓不屈の精神を以って奮進するつもりである。

新艇もお蔭様でもう直ぐ出来る。パックの人達も一生懸命やって呉れている。我々は唯安心して猛進するのみ。先輩及び学生諸兄出来る丈川へ来て下さい。今年こそ全一橋挙って我々多年の念願を成就させようではありませんか。御批判、御指導宜敷くお願い致します。

〔 一橋大学部報 1959年5月 〕

## 全日本へ向って

東商戦に勝ちましたものの、我々の漕ぎ振り、レース振りは、レース中途の両艇の接触、ゴール直前のイージーオールの中の二つの汚点を含めて、他校の先輩に指摘されるまでもなく、甚だ感服出来ぬものであったことを率直に認めねばならない。東商戦は名実共に日本漕艇界最高のレースであるべきであって、我々はただ勝つだけで満足すべきではない。我々クルーはまだまだ技術的拙劣、体力不足の未熟クルーである事を十分反省すべきである。私は東商戦終了後の懇談会の席上で全日本は東商両校で優勝を争おうではないかとあえて云った。東商で優勝を争えると考えたからではない。争わねばならぬと考えたからである。

東商戦はそれ自体大きな目標であるに違いないのであるが、云ってみれば全日本への過程の一つの試金石に過ぎず、確かに現在に於いては東大に1/3艇身勝っているという事は云えるとしても、全日本で東大に勝たねば決して東大に勝ったとは云えない。事実丁度4年前、

東商戦で東大に勝ちながら、全日本で東大に負けた例があり、我々は断じて前者の轍を踏んではならぬ。東商戦の終った晩私は東大の整調と色々話し合ったが、東商戦のような対校レースは謂わば両校親睦の意味が多分にあり、どちらが勝っても大したことはない。しかし全日本は違う。死に物狂いで争う真剣勝負だ。全日本では必ず一橋をやっつけてやると語っていた。彼等は必ず必死のスパートを掛けて我々を追い抜こうとするに違いない。我々もまた必死のスパートを掛けてこれを振り切らねばならぬ。

東商戦は相手が東大一つであった。云う迄もなく全日本に於いては相手は東大だけではない。東大と同等の、あるいは東大以上の相手が必ず幾つか居る。全日本制覇は決して容易な業ではない、それ丈に我々の青春全てを賭けて闘い取るに十分値する大事業である。幸いクルーは元気旺盛、一週間の妙高々原の陸上トレーニングを了え、戸田に合宿して、エイト、ナックルフォア、ペア、スカルをフルに活用し、更にランニング、鉄棒、バック台等陸上練習をも加えて、連日真黒になってやっている。

東商戦の勝に乗じ、昨秋からの意気を更に盛り上げ、これからの一日一日の練習に、1本1本のオールに我々の生命を打ち込んで一橋多年の念願を何とか成し遂げ度い。私は今年こそそのチャンス十分ありと信ずる。

〔 同部報 1959年7月 〕

## ローマへの抱負

雄伏十二年遂に一橋全国制覇を成し遂げることが出来た。過去十一年間、その年々のコーチ、対校をはじめ幾多の先輩、学生の不断の努力、悪戦苦闘にも不拘、勝利の女神は一橋に微笑んでは呉れなかった。恐らく、もう一橋は永遠に勝つことが出来ないのではないかと考えた人も居たに違いない。やっと今、一橋にまた黄金時代が訪れて来た。十二年前と云えば未だ我々が小学生の頃である。その当時から今日迄、常に心配苦勞されて来た諸先輩の喜びもまた格別であろう。やはり勝たなければならない。勝って本当によかったとつくづく思う。しかし今年勝つことが出来たのも決して偶然のことではないのだ。過去十一年間のコーチ、選手の血の滲む様な奮闘努力の結果が漸くにして今年実ったのである。血と汗と涙の結晶なのだ。勝つべくして勝たなかった年もあった。東商戦に勝ちながら全日本で同じ相手に敗れた年もあった。過去の貴重な失敗の経験が基盤となって今年の勝利が齎されたと云える。我々よりももっと努力し、もっと苦しんだ対校もあったであろうし、我々よりももっと強かった、しかしながら勝つことの出来なかった対校もあったであろう。我々は勝つべき気運にあったときにたまたま対校に乗ったに過ぎない。我々は勝つべき時期の対校であったことに無上の幸福を感じると共に勝運に恵まれず端艇部を去って行った多くの対校選手の努力を決して忘れはしない。

今年はまた先輩諸氏が特に力を入れて呉れた。新艇は作ってもらったし、度々スパート会を開いて呉れ、川にもよく来て呉れた。そして

よく文句を云われた。先輩に文句を云われると腹が立つがやはり非常な刺激となり、なに糞のファイトが湧いて来る。技術の面でも気力の面でも叩かれれば叩かれる程進歩する。先輩は時に癪に触るものであるが今考えてみるとやはり有難いものである。これからもどしどし発破をかけて我々を叩いてもらいたい。

全日本終了後、朝日招待レガッタ出漕の為北海道に行ったが、地方に行ってみて我々の知らない先輩が如何に熱心に我々を応援して呉れたかがよく分った。全国に居る何万の先輩が我々を見つめ応援して呉れているのだ。

その他に応援部が今年は非常に活躍して呉れた。一橋の応援団は最も熱烈盛んなものであり、我々の士気大いに鼓舞された。

この様に今年の勝利は、学生、先輩全体の努力の結果であって単に端艇部だけの勝利ではなく全一橋の勝利である。全国制覇は、コーチ、選手、マネージャーバックメンその他学生、先輩の努力の総和が他の大学のそれよりも勝っていなければ決して成し上げられない。ボートは丁度登山の様なもので、対校選手は山頂を目指す最後の登頂者であって、その後には多数の隊員が居り、ヒマラヤの様な大きな山を征服する為には国家挙げての援助を必要とする。我々はこの最後の登頂者に過ぎず、全日本選手権という大きなしかも峻しい山を征服出来たのも過去の貴重な失敗の経験と全一橋の強力なバックアップがあったからこそはじめて成し上げられたのである。そしてこれからオリンピックと云う、更に峻しい山に登るためには、これからの対校選手がもっともっと努力精進しなければならないことは勿論であるが、

全一橋の力の結合の総和が尚一層大きくならなければならない。勝つことは難しい。二度勝つことは更に難かしい。我々にはより大きな目標が眼前に迫っている。今年勝ったからと云って全てがよかった訳では決してない。幸にして一尺勝つことが出来たが、もし一尺負けた場合に云われるであろう色々の事を自分達でよく反省して来るべき戦のために備えねばならぬ。クルーは殆んど残る。我々には未だ最後のそして最大の目標が残されているから。今迄「勝てないのではないか」という考えが支配していた。勝った今「勝てるんだ」と言う自信がついた。勿論油断は禁物である。必ず他の大学も総力を挙げてぶつかって来るに違いない。

先輩、そして卒業される学生諸兄にはこの1年間本当にお世話になりました。想い起こせば只感慨無量です。十二年振りに勝ったのですから大いに喜んで下さい。しかし、後に残る我々は、課せられた任務を全て遂行する迄は、今年の勝利の感激も控え目に、只々明年五月のオリンピック予選のために全身全霊邁進する覚悟です。既に練習は開始しました。我々は佐藤コーチの下に、今迄に勝る意気込みで、遠く嶮しくとも、ローマへの道を必ずや切り開くつもりです。どうかこれからも今迄以上に川に来て我々を見守って下さらんことを！

〔 同部報 1959年10月 〕

## 戦い終わって

多くの期待が寄せられ、非常な希望を持って臨んだオリンピック予選もあっけない敗戦に終わってしまった。悔を千載に残すまいと常に自分に言い聞かせて来たつもりなのに、今振り返ってみるとやはり悔まれずにはいられない。オリンピック予選の為にあらゆる犠牲を払い、努力を惜まなかったつもりであったが、負けてしまったのだから、相手より頑張りが足りなかった、相手の方が我々よりももっと一生懸命やったんだと考えるより他に仕方がない。

昨年の全日本優勝は我々に大きな自信とローマへの希望を与えてくれた。夢破れた今、冷静に反省しようとしても、その気力さえ失いかけている現在であるが、やはり、我々のやり方に甘い点があったのではないか、安易な気持が心の隅のどこかにあったのではないかと、自責の念に駆られる。

敗因も色々考えられるであろうが、結局は相手より弱かったからだろう。そう簡単に割り切って考えてしまうことも出来ないかも知れないが、やはり強い奴が勝ち弱い奴が負けるのが勝負であって、負けたんだから弱かったんだと卒直に考えるより仕方がない。それにしても優勝することが如何に難しいかしみじみと感じさせられた現実の厳しさ、辛さを嫌と言う程思い知らされた。ローマに行けるとか、オリンピック選手になれるとか言うことは別として、負けることがこんなにも屈辱であるとは、暫く負けていなかっただけに、尚更強く感じる。

コーチはクルーを庇ってくれるし、マネージャーやバックメンも何

も言わぬが、その胸中を思うと堪らない。漕いだ俺達はまだいいとして、本当に済まないと思う人達が何人か頭の中に浮んで来る。

レースらしいレースもせずに終わってしまったのだから泣くにも泣けないし、今迄こんなに長く何の為に雨の日も風の日も練習して来たのわからなくなってしまう。しかし何時迄も泣き言を言っても始まらない。負けたんだから泣いても口惜しがるのは当たり前だし、がっかりするのも当然だが、今後端艇部が続く限り、レースが在る限りやらなければならないのだ。ボートは後向きで漕ぐべきスポーツではあるけれども、もう過ぎたことは過ぎたこととして、常に前向きに、新しい希望を持って突進しなければならない。進むべき道は唯一つ、今後のレースに勝つこと以外にはない。昨年やっと十余年の泥沼から漸く這い出して来たのだから、ここでまた再びもとの泥沼に落ちたのでは今迄の血の滲む努力も何にもならない。勝てば兎角、良い面ばかり目立って、悪い面は隠れがちである。逆に負けると悪い面ばかり目についてくる。この際、端艇部将来の発展の為に、悪かった点を端艇部全体について、みんなで、徹底的に洗ってみることが必要であると思う。本当に腰を据えて、じっくりと端艇部を建て直し、盛り立てよう。そうしておけば、俺達が出来なかったことは何時か必ず後輩諸君がやってくれるだろう。私自身、その時を楽しみに、これからも一橋端艇部永遠の発展の為の一つの礎として出来得るだけのことをしてゆきたい。

対校クルーは既に新主将の下に元気一杯、勝たんかなの決意も新に、新しい意気に燃えて、猛練習に励んでいる。クルーは依然健在、



今こそ一橋端艇部本来の力を発揮するべき時が来ているのだ。

〔 同部報 1960年6月 〕



浜松市 佐鳴湖 1964年

## コーチとして、OBとして

### “ 65年クルーへ ”

オリンピックもあのような結果に終り、日本の漕艇界はまたはじめからやり直さねばならなくなりました。今度はまたそれぞれの学校でそれぞれの方法でやることになります。いわば今スタートラインに並んだところですよ。いやすでにスタートしている学校も多いことでしょう。ボートで相手に先に出られ、泡をかきながら漕ぐこと程苦しいことはありません。来年はチャンスであると同時に今やっておかなければ、チャンスであるが故にレースが近づくにつれて焦りとなって思わぬ結果にもなりかねません。気持の上でシメてかかることが第一です。乗艇練習のポイントとしてフィニッシュから入ることは適当と思います。目的意義としては、今年のクルーはフィニッシュが出来ていなかった。来年のクルーは今年のクルーを更に完成させるべきもので、一番出来ていないフィニッシュを先ずやることは適当であり必要です。但し「フィニッシュはストロークの結果である」という言葉もあるように、フィニッシュだけうまくやろうと思っても、よいキャッチが出来、ブレードが水中を水平に引いていなければ(そしてそのためには、体が平にとび、ハンドルをまっすぐに引いていなければ)よいフィニッシュは出来ない訳です。これが一応出来ているという前提でフィニッシュについての注意すべき点を考えれば、

1 4本のオール引き切り（ブレードが水から離れるタイミング）をよく揃えること。

2 水中フェザーをしないこと。

（これらはコックスなりパウがよく注意すべきことです）そして一番問題になるのは、引き切りの際のボディの使い方にあると思います。（これは今年のクルーでやって完成出来なかった訳ですが私自身考え方としては間違っていないと思います。バック台綱引きで統一したらよいと思います。）

ナックル艇の使用については、気分転換（遠漕、サイド変え）という意味では良いと思います。ナックルがシェルを漕ぐためによりかどうかということがよく議論されることですが、私自身はこう考えています。ナックルを漕ぐことが害にはなりません。ナックルをいくら漕いでナックルでうまくなってもシェルに乗ったら、ナックルを漕がないでうまくなると同時に時間と努力を要すると思います。つまりナックルはシェルを漕ぐ為に（主として技術的に云って）あまりプラスにならないと思います。

〔 静岡大学部報 1964年11月 〕

## 優勝おめでとう

全日本は本当に良かったですね。堀内さんから全日本レースについて漕ぎ方もよく、見事な勝ちっぷりであったこと、そして静大や

医科歯科の活躍が日本漕艇協会を小艇重点の方向に強く引っばって  
いてその方向づけがボートのレベル向上になると考えているという  
手紙をもらいました。

今年こそ全日本で優勝するという初志を見事に貫徹し、しかもいろ  
いろなハンディキャップを克服して優勝した君達は本当に立派だと思  
います。

私が静大のコーチをするようになったのは堀内さんから話があっ  
て引き受けたのですが、君達が今年優勝して、曲りなりにも役目を果  
すことが出来、むしろ君達にお礼を言わなければならない位です。又、  
ボート関係の何人かからほめられ恐縮しています。

一緒に静大ボート部について話し合った何人かの顔が浮んで来ま  
す。君達の優勝の基礎をつくったのもそれらの先輩達であり、そう言  
った積み重ねが部をもっともっと強くする力となるものです。

今年全日本のフォアクルーの成績は必ずしも今後の静大ボート部  
の明るい見通しを示すものとは言えないでしょう。勿論、全日本に於  
て、優勝することが、学生スポーツの全てではありません。私自身、  
ボート部は学生の心身の鍛錬の場として最も良いと信じており、人間  
形成のように大いに役立つと考えます。

技術的、体力的にハイレベルにあることと、精神的にハイレベルに  
ある事が、全日本優勝につながると信じます。部活動の目的を全日本  
優勝に置かなくてもよいという議論もあると思いますが、全日本優勝  
を目標にすることが部員の肉体的、精神的なレベルアップにつながる  
と信じます。私の経験でも優勝したクルーや、その部の部員は心構え

人に接する態度が違います。

静大ボート部もやっと一流ボート部の仲間入りをし、全日本優勝を成し遂げた訳です。これを永遠のものにすべきです。

〔 同部報 1965年11月 〕

## HOW TO RACE

東商戦の優勝おめでとう。でもこれからですね。喜ぶのはOBにまかせておいて、もう一丁ふんどしをしめてかかってほしいと思います。東大も追っかけて来るでしょうし、他にも強敵は沢山居るでしょうから。レースはテレビで見ました。私の感じたことを少し述べさせていただきます。

### ( 1 ) 先手必勝

久し振りにスタートからリードしたレースをみて、やはりこれだと思いました。水の中でけんかをした場合、相手を先にポカリとやって沈めておいて、浮んで来たところをポカリ、またポカリで、これを3、4回くり返せば、どんな相手でも参ってしまいます。一橋クルーはこの最初のポカリが得意なはずです。我々の頃のレースでも、全日本の準々決勝位までは、最初のポカリで、ゴールまで相手が、浮んで来ない場合もあり、準決勝、決勝では、ポカリポカリをやったものです。オクスフォードなども、最初一撃を加え、レース中ずっと沈みっぱなしでしたがラスト50mで猛然と浮かびあがり、最後のワンストロー

クでかろうじて頭を押えたレースでした。これからのレースもえんりよなく最初のボカリを相手に加えるべきです。そして如何に効果的に最初のボカリをやるか大いにトレーニングすべきと思います。

我々の時のスタートダッシュもその前とは違ったやり方でした。

## ( 2 ) 根性

ハーフを過ぎて追い込まれたとき、ブレードが一寸浮いて来たのが気になりました。よく根性ということが云われますが、ブレードワークにも根性が必要だと思います。根性すなわち根(ばり)性です。フィニッシュまでブレードを浮かせずにはねばること、フィニッシュまで水にくいついてゆくこと、これすなわちブレードワークの根性が必要だと思います。でもよく東大を押えてくれました。1600m過ぎてからは大体安心して見ていました。

## ( 3 ) 辻斬りのすすめ

これからは東大以外のいろいろな相手ともレースをしなければなりません。

東大も勿論頑張ってくるでしょう、絶対やるという信念と、東商戦に勝った自信をもって、漕ぎまくって下さい。練習中、小手調べに、出来る丈よそのクルーと並べては如何でしょうか。まず去年の優勝校から、順々に強そうなところを待伏せして並べてもらうのです。これを辻斬りと称する人も居ますが、切れ味をためすために時々やる手だと思います。我々も、練習中にW大クルーとトラブルを起して話がかず、短漕を並べて結着をつけたり、東商戦が間近かに迫った頃放水路で、東大と並べながら戸田から向島の合宿に移動して、近頃は

ドライだと評されたりしましたが、そういうことはめったにしないとしても、出来る丈よそのクルーと並べてみることです。当時の東北大は勝つまでしつこくついて来たものです。

勝手なことばかり書きました。

北海道の野や山は今一面緑の草木で生い繁っていますが、つい2,3ヶ月前は雪と氷にとざされていました。永い冬の間、草や木は着実に根を下ろし、春の来るのを待っていたのです。そして今を盛りと花を咲かせています。諸君もきっとそうだと私は信じます。

〔 一橋大学部報 1966年8月 〕

## 朝日レガッタの思い出

昭和34年、全日本選手権エイト決勝で遠来のオクスフォード大学とデッドヒートを演じ30cmの差で劇的に凱歌をあげた我々一橋クルーは、その興奮醒めやらぬ中を次の日曜日に行われる茨戸の朝日レガッタ出漕のため上野から寝台車に乗り札幌に向った。招待されたエイトはこの2クルーのほか東大、早大、慶大の東京勢、そしてこれを迎えうつ地元北大の6クルー。札幌駅頭に立つ我々を北大応援部の猛者達が暖かく出迎えてくれた。8月とは言え涼しさを感じる夕暮れの中を宿舎の円山ハウスに向った。

戸田の暑さから一転、初秋の石狩原野での戦いとなった。雪辱を期すオ大、5年前ケンブリッジ大学を破り、オ大も撃破せんとする



北大、我々も勿論連勝を狙っていた。

宿舎から約30分ボプラ並木の間をバスで練習に通った。レースの前日の午後の練習を思い切って休み近くの民家で過した。その日私は公園の滑り台の塔の上から各校の練習を眺めていた。風はかなり強い日であったように思う。夕方には月寒牧場で北大学長のご招待によるジンギスカン鍋、賑やかなその日が楽しく思い出される。

レースの結果は戸田に続き再び勝ち、オ大は東大にも敗れて3位。しかしオアズマンとして彼等から学ぶものは沢山あった。気品あるオーソドックスな漕姿、ミドルからフィニッシュにかけて一気に引き切る豪快な漕法、あっと言う間に追いついてしまうゴールに向っての追い込みの凄さなど・・・今でも鮮やかに思い浮んでくる。同じ宿舎で彼等と一緒に生活した一週間は大変楽しいものであった。風呂の中ではしゃいだりあけ方ストームをかけてくる無邪気さ、陽気さ。いったん外出すればきちんと統制がとれブルーとしての自覚と誇りにみちた毅然としたマナー、艇に乗れば異常なファイトを燃やして漕ぐ漕手、両舷をラダーロープを握った拳で激しくたたいて漕手を叱咤するコックス、茨戸の畠の中を黙々といつも疾走するサブ選手など - オアズマンとして、アマチュアスポーツマンとして多くの感銘を与えていった。我々も札幌の関係者の方々の暖かい歓迎に感謝しつつ学生時代の思い出の一頁をとじた。

その後就職した私は東京オリンピックの年札幌に転勤した。茨戸を訪れあの時と同じようにコースを眺めたことを覚えている。あれから四半世紀、ボートへの熱き思い、幸いにも私の心の中に健在である。

ブルーとは

オクスフォード大のブレードカラーである。ブルーはケンブリッジとの対校戦に出場した選手のことも示す。(編集部注)

〔 朝日茨戸レガッタプログラム 1988年7月 〕

## ボートとは何か

ロサンゼルスオリンピックダブルスカル金メダルのブラッド・ルイスは、高校二年の二学期からボートをはじめたときのことを、「我々は、水球、アメフト、陸上、クロスカントリー、テニスといった他の競技に、燃え尽きたり、退屈したり、見捨てられた者たちばかりの信じがたいチームだった」と書いている。22歳でアジア大会水泳の銀メダルを獲得し翌年からボートを漕ぎ4年後の世界選手権決勝に進出した香港の選手、24歳でボートをはじめ、29歳でアトランタオリンピックの銀メダリストとなった選手もいる。日本では、大学に入ってから始めるスポーツで日本一になれるのはボートだという結論に達し、一人でザ・トールキング・クラブ(金をとる)をつくり、全日本選手権シングルスカル2連勝、世界選手権日本代表になった津田真男さんが有名だ。

大学のボート施設についてのエピソード。アメリカの鉄鋼王カーネギーがプリンストン大学のウィルソン学長から、ロー・スクール設立

のための寄付依頼を受けた。

Carnegie visited Princeton and told Wilson what his young men needed was not a law school but a lake to row on. Carnegie was a serious believer in the physical and spiritual good that came from rowing.

と The Amateurs の著書デビッド・ハブラスタムは書いている。カーネギーはロー・スクールへの寄付はせず、ボートが漕げるダム湖をつくった。このカーネギー湖は、今も学生がボートを漕ぎ、オリンピックアメリカ予選の会場である。

昨年11月、静岡大学OBからいただいたEメールを紹介したい。シリアのダマスカスからである。「今年のOB会は欠席せざるを得ず、非常に残念です。現役部員特に食事などで支援しているマネージャーに、ついでクルーの面々に宜しく申し上げます。私は、いまJICAのボランティアでシリアにきておりますが、いまの私は間違いなくボート部での4年間があったのことだと確信しております。この体、このハート、このスタンス、私がいまあるのはボート部の4年間なしには考えられません。一生懸命やればやっただけ、得る無形の財産は大きくなると信じております。現役諸君にも大学で学ぶと同様の無形財産をボート部で築いてほしいと願っております。」

静岡大学のコーチを頼まれたとき、私は日本一を目指すのであれば受けると言い、部員もそれを誓った。このメールの発信人大石銑太郎さんは、体もそれほど大きくなくおとなしい性格だったが、ボートで

鍛え、全日本選手権舵手付ペアで優勝した。不幸にも就職した製紙会社の工場で右手を切断してしまったが、ボートが彼に困難に立ち向かう勇気と自信を与えた。会社では部長をつとめ、定年退職した後、志願して戦乱の続くイラクの隣国シリアに赴任した。

〔 一橋大学部報 2004年1月 〕

## 「これだから勝った」

2010年2月、一橋大学ボート部選手諸君がスペインの大会に参加し、英国イートンのボートコースも訪問した。このコースは2006年の世界選手権大会にあわせて建設された。その建設理由について英国政府は、これからの英国を背負う人材育成のためと発表している。

そこで思い出すのが、引用句としてよく知られるウェリントン公の「ウォータールー(ワートルロー)の戦いはイートンの運動場で勝ちとった」という言葉である。このころイートンで盛んに行われていたのはフットボール。日本でこの言葉を最初に広めたのは明治・大正期のラグビー、サッカー関係者である。

もともとは、フランスの歴史家モンタランベールが1856年に著した『イギリスの政治的未来について』の中にある言葉に由来すると言われている。このフランス語の原書が一橋大学にあることを知り、その存在と該当箇所を確認を大月康弘教授(60経・平2博経)にお

願いしたところ、フランス思想が専門の社会科学古典資料センター助手福島知己氏（平5社）のすばらしい訳文までいただいた。「公は晩年にかけて教育を受けたこの美しい場所を訪れ、彼の仲間たちの末裔もまた早熟の逞しさを同様に発揮していることを認めて、『これだからワーテルローの戦いに勝ったのだ』と声高にいった」という内容である。

大月教授から「これだから」に留意とのご指摘をうけた。引用句となった言葉は、公がイートン校出身であるので、そこでの鍛錬が勝因と一般的に解釈されている。池田潔著『自由と規律』には、「イートンの名を挙げたのは、公が、イギリス教育のとくに基礎的鍛錬の面を重視したものと解釈される」と書かれている。だが、原書にまでさかのぼった具体的な指摘は今回がはじめてであると思われる。

我々1959年度一橋大学端艇部対校エイトクルーは、日本の学校スポーツのバックボーン思想のもとにもなったこのメンガー文庫の貴重本の存在を知ることもなく、小平での体力・持久力の強化と戸田の厳しいトレーニングに耐え、商東戦、オクスフォード大学を迎えた全日本選手権、札幌での朝日招待レガッタなど、この年の日本の主要大会のすべてを制覇した。敗戦後まだ十余年、オクスフォード大に勝ったことに大学、如水会関係者は驚き、歓喜し、我々は兼松講堂で凱旋報告をした。

朝日招待レガッタでは、オクスフォード大、一橋大、東京大、北海道大、早稲田大、慶応大のエイトクルーが同じ宿舎で約1週間寝食を共にした。これは英国名門大学の気品あるスポーツマンシップを

学ばせようという、当時朝日新聞北海道支社長であった中川英造先輩（5学）のご配慮であった。

そのときのオクスフォードの選手のひとりアレキサンダー・リンゼイさんはイートン校の出身だった。それから43年後の2002年、リンゼイさんたちが来日し、同じ札幌でメモリアルレースを行い、旧交を温めた。その時彼は、お互い体力は衰えたが友情に変わりはないという言葉を残した。

ボート部をはじめ、一橋大学の運動部はいま元気だ。如水会は、一橋大学運動部諸君の海外遠征、国際交流の支援をしていると聞きうれしく思っている。国内外での友情を生涯のものとし、国立のキャンパスや戸田ポートコースで大いに逞しさを発揮し、「これだからあの困難に打ち克った」と言わせるキャプテンズ・オブ・インダストリーが育っていると信じている。

〔 如水会々報 2010年12月 〕



各大学OBと茨戸で漕ぐ 2002年（著者は6番）



浜松市 天竜ボート場



# 高校ボートへの思い

## 大きい夢描き挑戦

天竜奥三河国定公園の玄関口、ここ天竜漕艇場は、いつものように、澄んだ空気と美しい緑の中で静かに水をたたえ、全国から選ばれた艇友を迎えます。

19世紀の終わりごろ、日本のボートは（旧制）高校、中学校のスポーツの花形でした。それは単なるスポーツではなく、近代化を目指し、進取の意気に燃えた学生が「この水はテムズ川に通ずる」と言っ、川や海でボートを漕（こ）ぎ、海外に雄飛する象徴として、心身を鍛えたと伝えられています。

それから100年、20世紀が終わろうとしている現在、国際化、グローバル化の時代です。この歴史と伝統のあるボートの連綿として伝わるオアズマンシップが、今もまた、単にスポーツとしてだけでなく、これからの時代を生きるバックボーンとして必ず役に立つと信じます。

天竜は高校ボートの選ばれた人たちが切磋琢磨（せつさたくま）し、世界を目指す場です。ボートも、これからの人生についても、夢を大きく描き挑戦する、ここに集う若人だからできることです。

平成の歴史とともに歩んだ「全国高等学校選抜競漕大会兼」JOCジュニアオリンピックカップ」も、今年は第10回記念大会となりました。全国のボートの仲間が、自然と人情あふれるこの天竜の地で、

交流の輪を大きく広げ、良い思い出をつくってくれることを念願しています。

そして、いつも変わらず、この大会を支援して下さる、天竜市はじめ多くの皆さま方に心から感謝します。

〔 中日新聞 1999年3月 〕

## 漕艇100年の伝統背に

われわれに大きな感動を与えた昨年のサッカーワールドカップ。優勝国ブラジルの名門クラブはもともと、ボートクラブであることをご存じでしょうか。フレミングやバスコ・ダ・ガマ、そしてポタフォゴなど有名クラブの正式名称は“クルービ・デ・レガッタス”。

100年ほど前、ボートクラブの中にサッカー部門ができたからです。

ボートのワールドカップ。昨年の第1戦は米国のカーネギー湖でした。鉄鋼王カーネギーが、若者の心身の鍛錬にはボートを漕ぐのが一番といって、プリンストン大学のキャンパスの中の川をせきとめ、ダム湖を造り、ボート場にして寄付したのです。これも100年前の話です。

琵琶湖で開催された第1回全国(旧制)中学校端艇競漕(きょうそう)大会から数えて100年を経た日本の高校ボート。時代が変わり、艇やトレーニング方法が変わっても、今も、世界の伝統を誇るスポーツであり、漕ぐ意義に変わりはないと信じます。

日本の中央に源を発し、太平洋に注ぎ、世界に通じる天竜川。日本三大美林の一つ、天竜美林に囲まれたここ船明ダム湖2000メートルコースは、全国の高校ボートの精鋭がお互いに切磋琢磨(せっさたくま)し、世界に雄飛する場として開設され、この大会も今年、第14回大会を迎えました。日ごろの練習の成果を存分に発揮され、シーズン緒戦を飾り、今年大いに活躍され、秋には、同じ会場で行われる国民体育大会「NEW!!わかふじ国体」で再会できることを願っています。

〔 中日新聞 2003年3月 〕

## **MILEAGE MAKES CHAMPIONS**

全国各ブロックの予選を勝ち抜き、第22回全国高等学校選抜ボート大会に出場する日本のジュニアボート精鋭の皆様を心から歓迎いたします。

天竜ボート場は、この冬の間ダム湖の水を開放して河床整備工事が行われ、3月初旬に水を溜め、コースが整備されました。

今年は時期を同じくして3月26日に第157回オクスフォード大学対ケンブリッジ大学対校レースが英国ロンドンのテムズ川4マイル4分の1(6,800m)コース行われます。

最近日本でも盛んになったヘッドレースは、85年前にこの歴史あるコースで生まれました。創設者は世界のボート史上最も著名なコー

チと言われているステーブ・フェアバーン。型にはめたオーソドックス漕法を改めたフェアバーンは長距離漕の信奉者でもあり、**Mileage makes champions.** は彼が残した言葉です。

この言葉を「不断の努力を積み重ねれば必ず成功する」という人生訓、座右の銘にし、各界トップとして活躍している日本のボートOBも多くいます。

ボートの春の高校選抜大会は、シーズン初めに2,000mをできるだけ多く漕いでもらうことを意図して創設されました。天竜美林に囲まれたこのコースで大いに漕ぎ、さらに上を目指し、そしてボートで培ったことを生涯にわたって生かしていただきたいと願っています。

天竜ボート場は、日本のジュニアボート選手が切磋琢磨する「ボートの聖地」として、これからもその歴史を刻み続けます。

(この大会は東日本大震災により中止。幻のメッセージとなった。)

**[ 2011年3月 ]**

## ふるさと静岡のボート

### 天竜漕艇場この10年、これからの10年

全国高体連漕艇部の45周年、おめでとうございます。天竜漕艇場での合宿や大会で大変熱心に指導され、運営されている高体連の先生方に接し、その真摯なご努力にいつも感心しており、心から敬意を表します。

毎年3月、その年度の最後の大会として天竜漕艇場で開催される全国高校選抜競漕大会は、平成8年度の大会が第8回大会となります。平成3年には全国高校総体も開催し、天竜漕艇場は平成と共に歩み、全国高校漕艇の大会会場として歴史を刻んできました。全国高校選抜大会はJOCジュニアオリンピックカップも兼ね、12月とこの大会直後の合宿も含め、日本の高校漕艇選手が切磋琢磨し、世界に挑戦するための場となっていることを地元主管協会長として大変嬉しく、誇りに思っております。

この機会に、天竜漕艇場の開設から現在迄の経過を述べさせていただきます。

天竜船明(ふなぎら)ダムは点検補修のため10年に1度、全水量を放流します。昭和61年2月、昔の天竜川に戻った川原に下りて、猿投農林高校の竹内隆先生のご指導で測量を行い、コースを設計、スタート地点を切り立った山に囲まれた場所に置き、コース全体も山と山の間添って、船の航行も無く、風や波のない6レーン、

2000m直線コースが可能となりました。静かで青く清い水、日本三大美林の一つに数えられる天竜美林の豊かな緑に囲まれ、静岡の温暖な気候の中で一年を通して漕艇のできるコースが昭和63年に誕生しました。天竜川最下流のダムで静岡県西部140万人への上水道をはじめ、農業用水、工業用水や発電等多目的のダムとして昭和51年に完成されたものですが、天竜市はこのダム湖水面の活用に心を砕いていたところ、平成3年の全国高校総体会場として、天竜市の熱意、静岡県の支持、そして私達静岡県漕艇協会も昭和32年の国体以来実績のある佐鳴湖から次の大きな発展のため新コース開発に乗り出し、中部漕艇連盟の強い後押しで実現の運びとなりました。10年前の貴漕艇部35周年記念誌に、当時の日漕普及部長鎧塚一氏が高校の強化対策として、秋の県新人戦代表を集め11月に東、中、西の水域選抜大会と12月合宿、そして3月に水域代表を一か所に集めて合宿することを提言されました。3月の大会が天竜漕艇場で開催可能となり、現在の県、ブロック、全国の合宿を含めた強化の一貫体制が作りあげられました。3月の大会は水上練習のできないまま臨まなければならない、1500mレースについての賛否等議論もありましたが、高体連幹部の皆様の熱意で実施され、定着し、評価されていると思います。静岡県漕艇協会も毎年全国大会を主管することに当初、資金面、準備運営体制に若干の不安もありましたが、関係各方面のバックアップと継続した経験も積み重なり、現在は年間行事の一つとして安定した運営をさせていただいております。

全国高校選抜大会を主管する中で、日漕や高体連の皆様、天竜市

ほか関係の皆様のご理解を得ながら、選手諸君を中心としてこの大会に参加する人達の大会であることを心掛けて参りました。決勝各レース終了後の桟橋での花束贈呈と表彰、帰路時間を考え閉会式は行わない、波の立たない審判艇、強化資料のための撮影艇伴走、記録組合せ新システムによる競技役員和省人化と速報等はその結果です。安全最優先を方針とし、レース中落水すれば即救助をルールとし、監督主将会議での安全意識徹底、救助監視艇の配備と迅速な出動体制をはかっております。

第7回大会の直前はダム点検補修の時期でした。私達は過去の10年を振り返るだけでなく、次の10年に向かって更に発展しなければなりません。7年後の平成15年の国体会場として天竜漕艇場が決定しており、その準備をする中で「ボートの甲子園」をスローガンとする天竜市は、漕艇のトレーニングと大会の場として新しい事業に取り組んでいます。

「全国に誇るボートのまちづくり整備事業」の具体案を平成8年9月の天竜市定例市議会で中谷良作市長が明らかにしました。それは平成9年度から11年度まで3ケ年間に約25億円を投じ既存の天竜漕艇場のグレードアップを中心に整備するもので、静岡県「世界に輝くしずおかづくり事業」に採択されるものです。市の整備コンセプトは a.天竜ならではの立地条件や自然環境を生かしたグレードの高いボート競技会場の整備 b.世界に通じるボート競技選手養成の場としての機能強化等で、具体的には(1)2000mコースの整備(現コース決勝線後方自由水域不足) (2)新艇庫、

トレーニングルーム、ミーティングルーム、配艇場の設置 (3) 旧国鉄橋脚を利用し兩岸を結ぶ橋等です。交通アクセスも重要な要素ですが、第二東名高速道路も計画され、浜北インターチェンジから、大会時の役員宿舎で知られる天竜閣まで新しい橋を渡って車で3分、漕艇場まで更に15分となります。これからの全国高校選抜大会の運営も今迄通り参加する人達のための大会を基本に、更に次代を先取りし、世界に通じる大会であってほしいと考えます。選手を大成させるためにも、各校漕艇部の日常の練習や試合の選手編成、選抜クルーを組むにしても、スカルで育成することがよく、舵手付フオアもスイープではなくスカルとし、選抜大会に導入することを検討されたらどうでしょうか。10年前、35周年記念誌で横山厚志先生がその理由を詳しく述べられており、その後中学の漕艇では採用、成功しています。

全国高校選抜大会が天竜漕艇場で継続して開催できることは天竜市に負うところ大であります。主催者の一つである中日新聞社にも大変お世話になっており、特に漕艇にこれだけ紙面を割いて扱っていただくことは他に例がないと思います。天竜市民の皆さんには高校総体の民泊でお世話になり培った友好関係が今も続いており、市民レガッタも盛んです。自治体に施設の充実をしていただき、それがトップ選手の大会やトレーニングの場となる、同時にそのスポーツが地域に根ざして市民、家族の交流、健康の増進に役立つ、社会貢献としての支援が民間から得られる、そんな姿を求めてきました。これからの10年もまた更にそれを一層発展させ、それが日本の次代を担う高校漕艇選手が育ち世界に飛躍することに役立つよう努力してゆきたい



と考えております。

全国高体連漕艇部の益々の発展をお祈りいたします。

〔 全国高体連記念誌 1996年9月 〕

## New!!わかふじ国体 ごあいさつ

明治36年(1903年)、沼津中学(現沼津東高)に端艇部が創設されて100年、静岡県ポート2世紀目の最初の年に、“New!!わかふじ国体”ポート競技を本県で開催できますことは、私どもの大きな喜びであります。日本三大美林の一つ天竜美林に囲まれたここ船明(ふなぎら)ダム湖の天竜市ポート場に全国各地から来場された選手監督の皆様を心から歓迎申し上げます。

この会場で毎年開催される全国高等学校選抜大会も14回を数えました。かつてジュニア選手として切磋琢磨され、今回は国体選手として、あるいは監督として参加されている方も多いと思います。練磨された力を十分に発揮され、今回はじめてここで漕がれる方と共に、国体の思い出になるレースを展開されることを願っております。

天竜二俣は、戦国時代に徳川・武田両氏が攻防を繰り返した地であります。また、信州と遠州を結ぶ要地として、江戸時代には、ばらで川下げされた木材がこの船明で集積され、江戸の需要に応じて更にかだ流しされました。現在も天竜材として有名であります。この緑豊かな自然の中で、歴史や産物にも触れていただき、かつてここで大会

を共にした人たちと旧交を暖め、更に新しいボートの仲間と交流の輪を広げていただければ誠に幸いです。

おわりに、本大会の開催にあたりまして、多大なご支援ご協力を賜りました地元天竜市の皆様はじめ関係の皆様に深く感謝申し上げます。

**[ 国体ボート競技プログラム 2003年9月 ]**



天竜美林に囲まれた浜松市天竜ボート場



浜松市 佐鳴湖漕艇場

## 全国中学選手権記念大会 ごあいさつ

1981年、第1回全国中学選手権競漕大会がこの佐鳴湖で開催されました。あれから四半世紀、第25回の記念すべき大会を再びこの地に迎えることができますことは、当地関係者にとってまことに嬉しく、全国からご参加の皆さまを心から歓迎申し上げます。

現在、静岡県での主な大会は天竜ポート場で開催していますが、佐鳴湖のボートの歴史はふるく、第2次世界大戦まえから浜松工専（現静岡大学工学部）が活動し、1957年には静岡国体のポート会場になりました。現在、中学校2校はじめ、高校、大学、社会人クラブの13の団体がこのポートコースで活動しています。

佐鳴湖は、浜松市の中央部にありながら今なお自然環境に恵まれ、賀茂真淵の歌会や徳川家康にまつわる史跡などもあり、周辺を取り巻く緑豊かな公園は市民の散策や憩いの場となっています。

今回この大会のためにコースや周辺整備も行われました。選手の皆さまには、日頃の練習の成果を大いに発揮されるとともに、全国から集まったボートの仲間との友情の輪を広げ、地元の人たちとの交流を通して、浜松の歴史や文化にもふれていただければ幸いです。

結びに、開催にあたりご支援ご尽力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げますご挨拶といたします。

〔 全国中学選手権プログラム 2005年7月 〕



イタリア ミラノ サンシーロスタジアム 1995年  
(著者は後列左から3番目)

# ボートとサッカー

## Jリーグと地域社会

Jリーグには、試合内容や運営、施設などさまざまな事柄を監視するマッチコミッサーがいて、公式戦では試合前に必ず両チームの監督、運営責任者、そして審判員を集めて話をする。その内容はフェアプレーの徹底につきるといってよい。ルールの厳守はもちろん、競技の品位の保持が求められ、何よりも相手選手を傷つける危険のあるプレーは厳しく禁じ、ペナルティーを科し、指導をする。そして応援するチームの12番目の選手といわれるサポーターにもフェアな応援、フェアプレーの精神が期待される。スポーツの基本はフェアプレーであり、心身の健全な発達を図ることである。現在のストレス社会や、昨今の殺伐とした世相をみるにつけ、スポーツの重要性をあらためて感じられる。

Jリーグの各クラブは、ジュニア（小学生）、ジュニアユース（中学生）、ユース（高校生）の下部組織を持ち、一貫した育成をしている。そこで育った選手がプロとして通用し、日本を代表する選手になれることを最終目標として、現在その体制強化を図っている。また、クラブ内だけでなくホームタウンを中心とする地域でのサッカーの普及、学校とのつながりも重要視している。Jリーグは地域の子供たちをはじめいろいろな人々に気軽にスポーツを楽しんでいただける機会や場所を提供し、サッカーが日常生活の一部になること、

すなわち地域に根ざしたスポーツ文化の振興を理念としている。

日本のスポーツは学校スポーツ、企業スポーツが中心で、地域に密着した社会スポーツ、クラブスポーツは発達しなかった。生涯学習、生涯スポーツがいわれ、最近では学校の週休二日制が導入されている。緑に囲まれたグラウンドや広場、さまざまなスポーツ施設があって、そこにはそれぞれの年代や体に合ったスポーツの楽しみ方や正しい練習方法を教えてくれる指導者がいる。地域の人々は思い思いにスポーツができる Jリーグが目指しているものはそのような地域に密着した総合スポーツクラブだ。そしてそのクラブにはJリーグのプロチームがあって子供たちの夢であるトップ選手がいる。

ジュビロ磐田の今年の目標はトップ3。オフト監督のもと、この目標に向かって頑張っている。良い成績をあげて期待に応えること、勝つことに全力を尽くすことはもちろんだが、Jリーグの理念の実現に向かって努力したい。

さまざまなスポーツ施設の建設は自治体にお願いしなければならないし、プロチームはその地域のできるだけ多くの人々にサポートしていただきたい。Jリーグのチーム名に特定の企業名をつけない理由はそこにあり、自治体、企業、サポーターの3者の支持により成り立つものと考えている。

Jリーグは静岡県に2チーム、愛知県に1チーム。日本の真ん中にJリーグの理想とするスポーツクラブが年々充実してゆき、スポーツを通して明るく、健全な地域社会になってゆくことを願い、努力するつもりである。 [ 中部経済新聞 1992年 ]



## 私の交友録

昭和34年の全日本選手権エイトに出場したオクスフォードのメンバーが昨年夏、43年ぶりに来日し、当時の選手が集まってメモリアルレースをした。東京海上火災の元静岡本部長岩崎洋三さんもそのなかのひとり。決勝でオクスフォードを破り優勝した一橋の主将だった私も、札幌の茨戸川まで出掛けた。岩崎さんはメルボルン・オリンピック選手。現在も大学の監督をされていてよくお会いする。

岩崎さんが慶応の3番を漕いだ昭和32年の早慶レガッタ。「全力で漕ぎ通すのがスポーツマン」の慶応、「艇を沈めるのはボートマンの恥」が早稲田。慶応艇は沈没、早稲田は水をかい出しながら完漕した。再レースを申し出た早稲田、勝ちも勝ちとした慶応。小学校国語の教科書の1章となった「あらしのボートレース」である。あのレースで舵をとった早稲田の指令塔が浜北市の東洋濾器製造社長・島田裕光さん。今も熱心に大会を観戦され、県ボート協会もご支援いただいている。

その協会で副会長として私を支えてくれているのが田中高志さんと行司伸吾さん。田中さんは浜松北高が長く、静岡市立商業高の校長を最後に退職され、この2年間は協会の理事長として静岡国体の準備に専念、見事成功させた。行司さんは平成3年の高校総体以来、天竜ボート場に近い二俣高校で教鞭をとり、多くの高校トップ選手を育てた名指導者である。

平成4年、ジュピロ磐田が発足したとき、サッカーと縁がなかった

私がヤマハ発動機から出向した。Ｊリーグに昇格するまでの１年半、さらに初優勝の年まで４年間の約６年間、杉山隆一さん、小長谷喜久男さんなどとジュビロ磐田創成期の苦楽を共にした。

ボート仲間も協力してくれた。大学の後輩がＪリーグチェアマン川淵三郎さんと古河電工の同期入社。愛知県ボート協会理事長は名古屋グランパス代表とトヨタに同期で入った。一緒に漕いだ日産自動車の副社長も横浜マリノスの常務をよく知っていた。そんな縁で私のことを話してくれたので、Ｊリーグの実行委員と監事になっても共通の友人がいて、すぐ親しくなった。県体育協会の役員もしていた私に、初対面の川淵さんは「内藤さん、それだったらＪリーグでも大丈夫ですよ」と言った。

ジーコさんの日本での現役選手最後の試合は磐田スタジアムだった。実行委員の私はマン・オブ・ザ・マッチのパネルを渡した。ジーコさんの出身クラブの正式名称はフレミング・レガッタ・クラブ。コリンチャンスオーナーの名刺にもオールを組み合わせたマークがあった。いずれもブラジルで１００年ほど前に生まれたボートクラブが起源である。ボートとサッカー、無縁ではなかった。

( 浜松市在住 ) [ 静岡新聞 2003年11月 ]

## トップアスリートへの道

一橋大学やボートのことを関連させながら、サッカーで頂点を極めたワールドクラスの外国人選手と指導者、日本を代表する選手のことをいくつか紹介したい。彼らとはJリーグジュビロ磐田で6年間一緒だった。今も交流をもち、ボート界での経験と共に、これがトップアスリートへの道の私の考え方のベースになっている。05年シーズン、大学トップを目指す諸君の参考になれば幸いである。

### 1 初心忘るべからず

02年に入学した部員諸君は、入学式で石学長が世阿弥の言葉「初心忘るべからず」を引用した話を記憶していると思う。この言葉は一流になる者の心得として、スポーツ選手の場合もよくあてはまる。今、一般的に言われている意味とは違い、世阿弥の言う「初心」とは初心者、つまり未熟で下手であったときのことをいう。中山雅史選手は、年間ハットトリック数でギネスブックに載り、ワールドカップで活躍した選手だが、今でも自分はまだまだ未熟で下手だと思っていて、率先して練習するし、試合が終わったあといつも反省しきりだ。

### 2 1年で飛躍的に伸びる

サッカーは90分間走り通す高い有酸素能力と、コンタクトプレイ

や一瞬の速さが勝負のゴール前の動きなどの瞬発力、この両方を必要とする。シーズン前のキャンプで体力トレーニングを徹底して行う。高原直泰選手は、世界のトップチームでプレーするという高い目標があって、公式戦が毎週あるシーズン中も、体力強化と技術向上の両方のトレーニングを同時に続けた。トレーニングルームでフィジカルを必ず行い、そのままグラウンドに降り、チームメイトとの技術・戦術練習に参加した。高い目標を常に頭に描き、強い意志で見事にやり遂げ、その年Jリーグ得点王になり、自分の夢を実現して今ドイツで活躍している。菅野淳フィジカルコーチの指導で成果をあげたことがマスコミの話題にもなった。

ボート競技は、レート35の場合、ストロークが0.7秒、フォワード1.0秒の間歇運動だ。ストロークはどちらかといえば瞬発力、フォワードはもっぱら有酸素運動で蓄積された乳酸を消化する。特にスタートなどは筋力・筋量で差が出る。

前にも書いたが、筋力や持久力は可逆化(逆戻り)現象を起こす性質があり、シーズン中もこのトレーニングを続けないと落ちてしまう。ロウイングのスキルアップを含め、やることは沢山あるが、強い意思を持つ一橋の諸君はこれができると思う。

### 3 スルーパスの秘密

試合の局面を一気に変えゴールに結びつける名波浩選手のスルーパス。彼は私に、どのシューズでも、キックして20mくらいは同じ

ようにボールが飛ぶが、その先は微妙なずれが生ずるので、このメーカーのこのシューズを工夫して使い、他のものは絶対履かないと話したことがある。野球の選手も自分に合ったバットを納得ゆくまでこだわり作ってもらおう。

ボートの場合、サッカーや野球以上に機材が影響する。オールと、カバー角の変動だけのことではない広い意味のリギングのことだ。理論を理解し、実践して工夫することが必要だと考える。

#### 4 暗黙知と形式知

一橋大学の野中郁次郎教授・竹内弘高教授は、数値や言葉で言い表せるものを「形式知」、職人の技など言葉では言い表しにくいものを「暗黙知」として、経営学の名著「知識創造企業」を著し、強い日本企業の秘密を解明した。

これを強いチームに置き換えてもびったりする。ワールドクラス選手のもっている暗黙知を形式知に変え、形式知から形式知で日本人選手に伝え、伝えた形式知が暗黙知になり、暗黙知と暗黙知が融合してジュビロ磐田は常勝軍団になったとあってよい。

優れた指導者は 暗黙知を形式知に変えて指導する。他の選手のプレーを見せて暗黙知で教える場合もある。トライアングル、コンパクトなど今までになかった理論と戦術を導入し日本のサッカーのレベルを飛躍的に高め アジアのトップにしたハンス・オフト氏をジュビロ磐田の第2代監督に迎えた。例えば、「集中する」とは、カウンタ

ーアタックを予測して、フォーメーションを崩さず攻めることで、3選手がいつも同じ距離を保つのがトライアングル。02年日韓ワールドカップ優勝のブラジルチーム監督のフェリペ氏が第3代ジュビロ磐田監督。同じように具体的に教えた。ラインを割ったボールを自分を取り、マイボールだと線審にアピールすることを「ファイティング・スピリット」のひとつとして教えた。

## 5 ワールドクラス選手の徹底ぶり

ワールドカップアメリカ大会で優勝、フランス大会でも活躍したブラジルチーム主将のダウンガ選手。ジュビロ磐田で4年間活躍した。試合や練習中は、味方選手に怒り、ファイトあふれるプレーをする世界のトップ選手だが、ユニフォームを脱げば普通の好青年、アウェイの試合の帰り、新神戸駅のホームで雑談中、彼は突然隣のホームに向かって手を振った。私が振り向くとそこには誰もいない。まわりの選手諸君がにやにやしている。いたずら好きで、他の選手のバッグを隠したりもする。一方、公の席では、見違えるほど端正なふるまいで、記者会見では世界のボランチも私のあとに従って登壇する。

アルコールは平衡感覚、反応時間や正確さなど運動神経に悪影響を与え技術を低下させ、筋肉の血流も低下し疲れやすくなりパワーも失うといわれ、ダウンガ選手はじめトップ選手は酒を一滴も飲まず、徹底している。その代わりに、食事では会話を大いに楽しみ、ストレスを発散させる。私は彼らのテーブルには入れない。なぜかという、

彼らの話はだいたい審判をこき下ろしたり相手選手の論評をし、時にはフロントのわれわれのことを話の肴にして延々とやるからだ。

メルボルン合宿で、オンとオフのことを教わったと報告書で読んだ。話題は違うだろうが、効果は同じようではないかと思う。

## 6 ケミストリー

オフト監督のコーチ会議に私も参加した。精神面も大事な要素で、例えばヘッディングは、ジャンプ力、首の筋肉の強さのほかに、勇気(courage)がある。スピードには3つあって、速く走るスピードだけではなく、考えるスピードと判断するスピードを重視する。そのオフト監督のコンセプトにケミストリーがある。化学薬品は配合により顕著な効果を示す。選手を個々に比較すれば劣るが、選手の組み合わせと戦術の徹底により勝つというものである。オフトマジックといわれたが本人はオフトロジックという。

エイトは漕手8人とコックス1人の9人のチーム、オフト監督のコンセプトとはやや違うが、コーチの考えをよく理解し、徹底的に漕ぎ込み、9人と艇とオールが調和したとき、エイトにケミストリー効果が生まれるのではないか。ロウイング環境のよい転地合宿などでケミストリー効果を生むことができると思う。

## 7 練習を楽しみレースを楽しむ

緑の芝生の土を走りボールを蹴るサッカーは楽しい。選手もミニゲームなどで楽しむ。それとは別にトップ選手の楽しみ方がある。

試合でボールを奪い、ドリブルやパスワークで相手ゴールめがけて突進し、フィニッシュするときは、あたかも百獣の王が獲物を追い仕留めるようで、これがスリリングで楽しいと藤田俊哉選手はいう。これがトップ選手、トップチームのサッカーの楽しみ方だ。逆に攻められて守るときは坂を登るように苦しいともいっている。

全身運動で水の上で心地よい汗をかき、水面をすべるように艇を走らせるロウイングは楽しい。ボートレースは、リードすれば相手を見ながら漕げる。スタートで相手を抑え、相手が出てきたら引き離し、最後にとどめをさす展開はトップクルーの楽しみ方だ。高原選手のように、2で書いたことを、強い意志で行うことが必要だが、それをやれば、レースで緊張感のある楽しみを味わい、まわりを感動させ、自分も感動する。

## 8 理念とマネイジメント

サッカーの神様、いま日本代表監督のジーコさん、日本でプレーした最後の試合はジュビロスタジアムで、Jリーグ実行委員の私は表彰する役目だった。あのときの達成感あふれたジーコさんのすばらしい笑顔を今でも鮮明に覚えている。

そのジーコさんが育ったクラブはブラジルのボートクラブ。



1895年、リオのエリート向けのボートクラブとして創設され、その後、別のクラブを離脱したサッカー選手を受け入れサッカー部門ができた。離脱の理由はクラブの理念とマネジメントにあったといわれる。正式名称は現在もフラメンゴ・レッガッタ・クラブである。

1885年、一隻のカッターが東京商業学校に配備された。その年を一橋ボート部の起源とする。今年には120周年の記念すべき年、将来のキャプテンズ・オブ・インダストリーが、新しい艇庫で、一橋の理念としっかりしたマネジメントで、元気に活躍してくれると確信している。

[ 一橋大学部報 2005年1月 ]

## あとがき

今年3月の静岡県ボート協会会長退任を機に、ボート関係の和書・洋書・専門誌・資料などを浜松市立天竜図書館に寄贈した。「ボートのまち天竜」の図書館として、ボートコーナーをつくっていただけるというありがたいお話しである。

資料のなかに、大学ボート部部報、新聞、大会プログラムなどに50年以上にわたって、私が書いたものがあり、それを静岡県ボート協会副会長・理事長として私を支えていただいた田中高志先生に読んでもらった。そのなかから、年代別にある程度バランスをとり、分厚いものにならないよう選び、少し並べ替えたのがこの冊子である。見出しを変えたもの、文章を削ったものもあり、「文集抄」とした。田中先生に序文もお願いしたところ、身に余るお言葉をいただき恐縮している。

50年前と比べ、日本も世界も変り、ローイングの科学も進歩した。しかし、ボートとは何かはいまも変わらないと思いながらこの冊子の校正をしているとき、次の二つのことに出あった。

ひとつは、日本語翻訳本から引用して紹介したブラッド・ルイス（この冊子34頁）が、**Rowing Faster**（**Human Kinetics**社）新版に書いた序文である。27年前のオリンピック、ゴールド・メダリス

トは、近況を述べ、最後に、「ブレードの形状は変わり、トレーニングプログラムは進化した。しかしローイングの大部分（the best parts of rowing）は変わっていない」、続いて“:rowers finding themselves and securing their place in the universe through the discipline of rowing.”と書いている。

もうひとつは、「良い会」の皆さんが佐鳴湖・浜名湖周航に来られたことである。私は、モーターボート2隻を伴ったレクリエーションタイプ舵手付フォア6艇の出発を見送り、帰りを佐鳴湖に通ずる新川で待った。2泊3日の周航の最後をゆったりと漕いでくる艇は、私の眼前でレートをあげローイング10本を漕ぎ、見事にセトルダウンして、また静かに漕ぎ続けた。その風格ある漕姿に私は感動した。昭和41年頃大学ボート部を卒業、社会で活躍して古希を迎えるOB・OGが、出身校の垣根を越えて集まり、琵琶湖や瀬戸内海などに、世俗的な時間や空間を超えたローイングの広い世界を持っている。

私は、ブラッド・ルイスの言葉と「良い会」の皆さんの姿を重ね合わせた。ローイングで鍛えた人たちがその世界に自分自身をしっかりと根づかせている。ローイングは奥深く、そこにはボートで結ばれた強い絆があり、人生を豊かにするスポーツ文化があることをあらためて認識し、私もボートを続けて良かったと思った。

おわりに、この冊子への転載をご承諾いただいた中日新聞社、静岡新聞社、中部経済新聞社、(社)如水会(一橋大学同窓会)、

一橋大学端艇部、静岡大学漕艇部、全国高体連ボート部、札幌ボート協会、静岡県ボート協会、掲載のご承諾をいただいた旧制第一高等学校同窓会、(社)日本プロサッカーリーグにお礼を申し上げます。

2011年10月 内藤元巳



## 春は春は

「作詞 一高端艇部 御手洗文雄(明治 43 年医科卒)」

春は春は桜咲く向島 ヤッコラセーヤッコラセー  
オール持つ手に花が散る花が散る アウンアウン

夏は夏は緑濃き綾瀬川 ヤッコラセーヤッコラセー  
オール持つ手に蛍飛ぶ蛍飛ぶ アウンアウン

秋は秋は鷗飛ぶ品川へ ヤッコラセーヤッコラセー  
オール持つ手に月が射す月が射す アウ ンアウ ン

冬は冬は名にし負う坂東太郎へ ヤッコラセーヤッコラセー  
オール持つ手に雪が積む雪が積む アウ ンアウ ン

「出典 第一高等学校寄宿寮寮歌 解説(2004 年発行)」



老いも若きも一緒に歌う 三菱養和会戸田艇庫 2001年

(著者は左から3番目)